

## サンプル

「うっぷ……」

光によって靴下を食べさせられた幸志郎は吐き気を抑えながら仕事をしていた。

放課後に責められていたので、勿論仕事が遅れ残業だ。

テストの採点、評価、日誌、明日の授業の準備……諸々をなんとか片づけて気づけば19時だった。

(明日が休みでよかった)

胃にボーリング玉でも落ちたようなズッシリとした重みが寝ただけで消えるとは到底思えなかったし、靴下なんて食べて身体が大丈夫なのかすらわからなかった。

あの時は鞭への恐怖と光の命令と貞操帯を握られているている脅迫での感情でなんとか食べれたのだ。

射精後の今では苦しさ与时折胃から上がる胃液とは違う据えた酸っぱい汗臭い臭いの原因が何かと考えるかと幸志郎は自分がいよいよ光にどう言う存在に貶められたのかと理解して絶望した。

(家に早く帰らないと吐きそう……)

もう他の先生は全て帰ってしまったらしく、職員室には幸志郎しかいない。

ゴロゴロ。

お腹からヤバい音がしていた。

気を抜くと吐いてしまいそうだ。

(うっ、吐きそう)

今なら誰もいないし、いっそー。

そんな考えが過ぎった瞬間、ガラガラと教室の扉が開けられた。

「あら、まだ残業？ 相変わらずノロマね？」

「東先生……」

一瞥とともに投げかけられる冷たい言葉だが、この女性上位の時代では、男を見下す女性は普通とも言えた。

仕事の能率の悪い自分を見下す眼差しが、光のモノと被る。

東加奈枝ー容姿端麗な彼女ではあるが、何故か彼女の担当した男子生徒は度々行方不明になると言う恐ろしい噂もあるが、それがかえて彼女を謎のベールでより魅力的に見せていた。

ドクン！

同僚のはずなのに、最近は女性と言うだけで自分よりも上の存在だと理解させられる。

光の調教が骨の髄まで幸志郎を犯していたからだ。

それを理解しただけで、幸志郎のペニスが熱くなる。

もっとも、それを大きくすること貞操帯により許されないが。

「後どのくらい残ってるの？」

「も、もう終わります」

「ふ～ん、なら校舎の見回りするからついてきなさい。1人だと大変なのよ」

「は、はい」

同僚に顎で使われていると言うのに、幸志郎は逆らえなかった。

光によって完膚無きまでに壊されたプライドはもはや修復不能で、幸志郎にとって女性からの命令は従うべきだと心身に刻まれていたからだった。

「早くしなさい。クズね」

「は、はい！」

蔑まれる眼差しに幸志郎はビクリと身体を震わせ、椅子から立ち上がった。

ゴロゴロという音と急に動いたせいか、胃の中身が揺れて吐き気がより強まる。

「うっぷっ」

「何その顔は？ 気持ち悪いわけ？ まさか職場で飲んだりしてないわよね？」

「の、飲んでません……」

「そう。なら早く見回りにいくわよ」

加奈枝は幸志郎に見向きもせず冷たく告げると先に職員室から出ていった。

(よかった……吐かずにすんだ)

よろよろと吐き気に耐えながら校舎を見回るために職員室を出るのだった。